

和訳聖書翻訳の変遷

聖書普及活動開始百二十年を迎えて

昨年二〇〇五年十月、日本聖書協会は、聖書普及活動開始から百二十年の節目を迎えました。一九世紀、二〇世紀、二一世紀と三つの世紀を経る中で大きな変化を経験し、明治、大正、昭和の三つの時代に、その時代を映すようにして「文語訳」「口語訳」「新共同訳」という三つの和訳聖書が生み出されてきました。今回の特集では、聖書が和訳された歴史をたどりつつ、これからの聖書に求められることについて考察したいと思います。

編集部

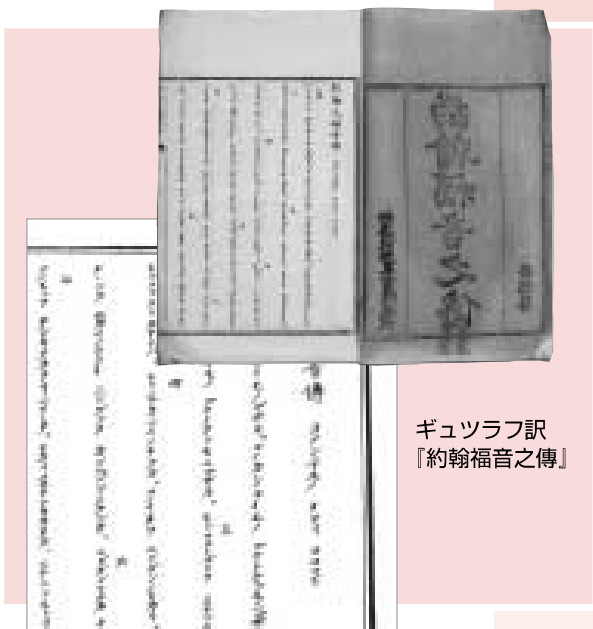
序 和訳聖書のあけぼの

—— 個人訳の時代

現存する最古の和訳聖書

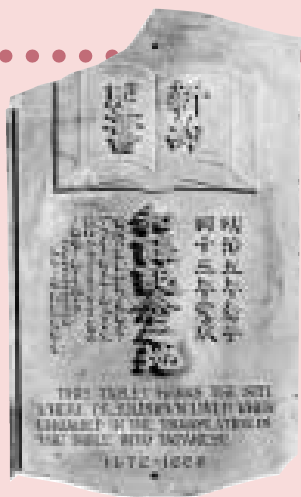
一九世紀に入ってから間もない一八〇四年、初めて英国ロンドンに聖書協会が組織されるなど、欧米では、海外諸国への宣教のために聖書翻訳をしようとする気運が高まっていた。この時代、中国、インドネシアといった東アジアに宣教師たちは多数遣わされ、現地語への聖書翻訳に尽力していた。

ドイツ人宣教師カール・ギュツラフは東洋伝道に召命を覚え、マカオに滞在していた。日本伝道を志していた彼は、尾張出身の三名の日本人漂流民に出会って日本語を学び、一八三七（天保八年）年、『約翰福音之傳』『約翰上中下書』をシンガポールで刊行した。これが現存する最古の和訳聖書である。ギュツラフ訳は木版刷りのカタカナ書きで、ヨハネ福音書の冒頭「ハジマリニ カシコイモノゴザル、コノカシコイモノゴクラクトモニゴザル」という文章でよく知られている。学問のない漂流民たちの日本語だけを頼りに総力をあげて訳した跡がうか

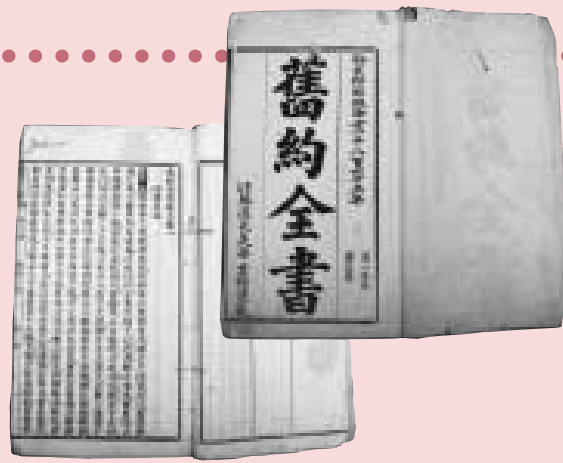


ギュツラフ訳
『約翰福音之傳』

がえる。カタカナ書きとしたのは、一般の人が読める日本語翻訳を目指したからだと言え、ギュツラフは書き残している。



米国聖書協会支社寄贈の
新約聖書和訳記念碑
(横浜共立学園所蔵)



ブリッジマン・カルバートソン訳『舊約全書』



『新約全書』
(翻訳委員社中訳
「新約聖書」
分冊)



『引照 新約全書』(翻訳委員社中訳)

一八五九(安政六)年十月、開国間もなく来日したヘボン、このギユツラフ訳聖書を携えてきたと言われ、その聖書が、日本に届けられた最初の日本語聖書と確認されている。しかし、ギユツラフ訳は日本語としての完成度が低いとされ、広く使われることはなかった。同様に、一八五五年の「ベッテルハイム訳」も琉球語訳であったため、普及することとはなかった。

和訳聖書の源流としての漢訳聖書
一八八七年に文語訳が完成するまで、その源流となり和訳聖書の代役を果たしたのは中国語の漢訳聖書であった。ロンドン宣教会のモリソンは、一八一四年に中国語訳聖書の新約を『新遺詔書』として広東で刊行し、ミルンの協力を得て一八二三年に旧新約の『神天聖書』

をマッカで刊行した。これが最初の中国語訳旧新約聖書であった。中国語訳聖書はさらに改訳が重ねられ、代表(委員会)訳が一八五二年に『新約全書』、一八五四年に『舊約全書』として出され、さらにブリッジマン、カルバートソンによる『新約全書』が一八五九年に、『舊約全書』が一八六二年に刊行された。日本ではこれらの中国語訳聖書が、漢語の分かる知識人たちに読まれた。特にブリッジマン・カルバートソン訳聖書を基に、その漢文に訓点を施した『訓点新約全書』(一八七九年)は、一八八三年の『訓点舊約全書』とともに、文語訳が完成・普及するまでの期間、日本国内で広く用いられた。

1 文語訳聖書ができるまで

「新約聖書」翻訳——初めての教派合同訳

一八五九年に鎖国から開国して以降、日本に派遣されたプロテスタントの宣教師たちは、日本語の習得の合間に聖書の日本語訳を試みていた。この時期、教派訳、個人訳として、バプテストの宣教師ゴープルによる『摩太福音書』(一八七一年)、長老派のヘボン、オランダ改革派のブラウンによる『馬可傳』『約翰傳』(一八七二年)、『馬太傳』(一八七三年)が刊行されている。

同じころ米国聖書協会(ABS)は、日本に



『舊新約全書(明治訳)』(1887年)



『旧約全書(分冊)』(聖書翻訳出版常置委員会訳)

において教派に偏らない共同翻訳の日本語聖書完成を目指して、日本にいる宣教師たちに協力を求めて働きかけていた。一八七二年九月、横浜居留地のヘボン宅にて在日プロテスタント宣教師会議が開かれ、各派共同で聖書翻訳を行う組織的な翻訳事業として「翻訳委員社中(後に委員会)」が発足した。翻訳方針として、

中国の代表委員会方式にならって原典に忠実であること、新約はギリシア語原典「公認本文」(Textus Receptus)を底本とすること、重要な訳語は合議により決定するなどの基本原則が定められた。海外の三つの聖書協会(米国聖書協会、英国聖書協会、スコットランド聖書協会)の支援のもとに一八七四年六月から訳業が始められ、訳了した書より分冊で刊行していき、ついに一八八〇(明治一三年)に新約十七冊全巻が完成して、『新約全書』と『引照 新約全書』として刊行された。訳業には、当時広く読まれていたブリッジマン・カルバートソン訳漢訳聖書が参考にされ、日本人翻訳助手の力を借りて、漢文訓読み、ひらがな交じりの文体となった。それゆえ、多くの漢字熟語は漢訳聖書に由来している。

「旧約聖書」翻訳への取り組み

旧約聖書の翻訳にはさらに歳月を要した。一八七六年十月、東京在住の各派の宣教師が築地に会合し、旧約聖書の翻訳に着手することを決議し、東京聖書翻訳委員会を組織した。「新約聖書」と同じく海外の聖書協会の支援のもと、一八七八年、聖書の翻訳は各派の共同事業であるという方針が決定され、各派から一人ずつ委員を選出し、ヘボンを委員長とした聖書翻訳出版常置委員会が新たに設置され、十二名の委員によって訳業が開始された。そ

して幾多の紆余曲折を経て、一八八七(明治二〇)年に全巻二十八冊の旧約聖書が刊行された。一八七二年より十五年の歳月を経て旧新約聖書が完成したのだが、この間、一貫して責任を負い、大部分の翻訳を担当したのはヘボンであった。

この「明治訳(元訳)」は、各派の翻訳委員が結集した委員会訳であったことと、日本人学者によって国語として整えられた訳文であったことから、多くの人々に読まれる最初の日本語聖書となった。漢訳聖書を参考にしたことと格調も高く、一個の文学作品として、太宰治、芥川龍之介といった近代の作家や、田中正造など社会運動家にも影響を与えたことは、鈴木範久氏による小誌連載記事「人物と聖書」でも紹介されている。

大正改訳「新約聖書」

共同翻訳として完成した明治訳(元訳)はキリスト教界、文学界に広く普及したが、明治中ごろになると、内外の聖書神学の研究がさらに進んだことや、海外の宣教師主導で進められた明治訳に対して、日本人学者を中心とした改訳の要請が高まったこともあって、一九一七年にはネストレを底本として新約が改訳される運びとなった。それが「大正改訳」と呼ばれる新約聖書である。旧約だけはその後改訳が行われないまま、第二次世界大戦後まで用



『改譯 新約聖書 (大正改訳)』(1917年)

いられることになった。現在も、旧約を明治訳、新約を大正改訳とした「文語訳」が、口語訳(一九五五年)の刊行以降も発行され続けている。「文語訳」は、従来の一段組活版が、一九八二年には二段組の新組版とされ、現在でも年間三千冊程度が頒布されている。

ライカ(BH)三版、新約の原典はネストレの二十一版とした。訳業は急ピッチで進められ、新約は一九五四年、旧約は一九五五年に刊行された。そのため、訳文についての批判もあったが、「口語訳」はキリスト教伝道の高まりとともに広く読まれ、年々頒布数を伸ばしていった。また、国際ギデオン協会の新約聖書としても長年用いられたが、現在は、一九八七年に刊行された「新共同訳」の普及とともに口語訳聖書の頒布数は減少している。しかし、今なお公用の聖書として教派採用が継続されていることもあり、年間二万冊弱が頒布されている。



『口語訳聖書』(1955年)

2 『口語訳聖書』

戦後の新しい時代に
合った言葉で

第二次世界大戦後、国民教育に「新仮名遣い」と「漢字制限」が採用され、新「日本国憲法」も口語体となったことで、聖書においてもより現代的な口語改訳の要請が高まってきた。一九三七年に三つの海外聖書協会の働きを引き継いだ日本聖書協会は、一九五〇年に改訳委員会を設置し、翌年、委員を選出して、口語訳聖書の完成を目指した。旧約の原典は Biblia Hebraica

3 教会一致運動による『聖書 新共同訳』

一九六〇年代に入ると教会一致(エキュメニズム)運動が起り、カトリック教会は一九六二年の第二バチカン公会議以降、プロテスタント教会と協力する方針を打ち出し、聖書事業のうえでも両者による共同の聖書翻訳実現が望まれるようになった。一九六八年には協議の末に「聖書翻訳におけるプロテスタントとカトリックの共同作業のための標準原則」を連名で公表するなど、両者の共同による聖書翻訳

は世界の趨勢となり、日本でも一九七〇年に共同訳実行委員会が組織された。そして一九七八年に『新約聖書 共同訳』が完成したが、これは教会の外にいる人々にも読まれるようにと動的等価の翻訳理論を用いて訳されたため、教会関係者には不評だった。そこで、その後の翻訳作業は中止され、改めて、原文のニュアンスを大事にした、礼拝に使用する聖書として朗読に適したものとという翻訳方針が確認され、また固有名詞は原音表記を基本とし、慣用の定着した一部人名等についてはこれを尊重するということになった。このようにして一九八七年九月、十八年の歳月を経て、日本でのカ

*動的等価

聖書が書かれたころの形式と内容にできるだけ近づけようとする形式的等価とは逆に、現在の読者に分かるようにすることを重視する翻訳理論。



『聖書 新共同訳』旧新約聖書66巻のもの(左、中央)と旧約聖書続編つき(右)

トリックとプロテスタントによる最初の共同訳である『聖書 新共同訳』が刊行された。それは、一八八七年に完成した明治訳からちょうど百年後にあたる。

『聖書 新共同訳』では、旧新約聖書六十六巻のものと、旧約聖書続編のついているものの二種類が出版されている。旧約聖書続編とは、プ

ロテスタントではすべてアポクリファと呼ばれており、カトリックではそのうちの十書を第二正典としているもので、新共同訳では旧約聖書と新約聖書の間で置かれている。こうして、カトリック、プロテスタントどちらの教会でも同じ聖書を用いて礼拝を行うことができるといったようになった。

カトリック教会では新共同訳は、ミサで朗読され、「聖書と典礼」に印刷されたものが全国で用いられている。またプロテスタント諸教会でも、公用の聖書として従来の口語訳からの切り替えが進み、現在、教会典礼用の聖書として国内で最も広く用いられている聖書だと言える。

新時代に求められる聖書とは

このように、日本の開国から第二次世界大

戦、戦後といった時代の変化に歩調を合わせるようにして、明治、大正、昭和の三つの時代に、文語訳、口語訳、新共同訳という三つの和訳聖書が誕生してきた。新共同訳は、一九八七年の刊行から十八年を経過した今日、キリスト教界において、カトリック、プロテスタント両者にエキュメニカル運動を浸透することに寄与してきたと言える。そして、なおもキリスト教伝道が困難な日本において、聖書が宣べ伝える神のみ言葉をどうしたら人々に理解してもらい、福音を届けられるのかということが将来の課題として残されている。新しい世代へ信仰のバトンを渡すためにも、新時代に求められる聖書を模索しつつ、日本聖書協会は大きな使命を感じ、その働きを担っていきたい。

翻訳部の新設

日本聖書協会では2005年11月に翻訳部が新設され、新共同訳『パノラマバイブル』、『スタディバイブル』など、より読者の裾野を拡げることを目途とした企画を進めている。翻訳部では、2004年の『スタディバイブル』新約版に続き、旧新約版を2006年度に完成することを目指している。

この流れを受け、日本聖書協会では、今年の大連休の5月3日から5日までの3日間、「国際聖書フォーラム2006」を開催し、国内外の聖書学者を招いて、聖書翻訳に関する研究発表や、さまざまなテーマでのセミナー、シンポジウムを計画している。「今、聖書を問う」というテーマのもとに、聖書について広く学んでいただける機会として企画している。キリスト教会の教職者や研究者に限らず、多くの方々にぜひこの機会を捉えて参加していただけるようお願いする。